【ねがいましては】

平成２１年４月２４日　　*KYOWA SCHOOL*
第２２２号
「みんなハーイ」
　４月、新学期が始まりました。クラスが変わったり、担任の先生が代わったり。子どもたちの表情には様々な色がにじみ出ています。全体的に感じられるもの・・・「あー、また始まった。」
　私は、子どもたちの表情の変化を最も重要なものとして捉えながら接するようにしています。
　「勉強のことでは叱らないよ、こころのことには厳しいよ。」といいながら接している以上、子どもたちの心の状態には細心のアンテナを向けます。
　表情はこころを大きく映し出します。夢中になっている表情、眠そうな表情、物思いにふけっている表情、今にも泣き出しそうな表情・・・いろいろです。
　学校の姿、勉強の姿、今の現場は理想とはかなり距離を置いてしまっているようです。そのわけは子どもたちの表情です。
　ここでは学校からの宿題をしてもよいことにしています。夕方のそろばんのクラスにはポツリポツリとドリルやプリントに向かっている子がいます。そのほとんどが無表情、または眠そう？　たしかに宿題は楽しくはない。
　お母さま方の少年期に宿題が楽しくてたまらなかったという思い出をお持ちの方はいないと思います。英語の世界でもそうなのですが、『勉強する』は『study』、宿題を『する』は『do』なのです。ただ『～する』という感情の入らない一般的な『do』です。I did homework in my room.　といった感じです。
　ある子は宿題が出ると、間なしにあくびを連発します。泣きっぱなしです。（あくびで涙が出るのです）
　ある子はポツリとペンを走らせては止まります。その繰り返しです。ですから宿題だけでその日の授業が終わってしまうこともあります。お母さま方であれば叱る場面なのでしょうか。そこで私は子どもたちに語りかけます。
「ねえ、〇〇ちゃんの手が止まったら声をかけてあげてね。その繰り返しでいいからね。」
　子どもたちはわかっています。どんな気持ちでこの子が宿題に向かっているのか。だから皆、気の毒そうな表情で見つめています。
　生意気なようですが、私の考えている先生像は『いつも子どものこころに寄り添う』です。子どもたちの理想の先生像は今も昔も『いつも隣にいてくれる尊敬できる人、お母さんやお父さんとはちがった、ひとりひとりに温かいまなざしで接してくれるおとなの人、または新規採用の方であればお兄さん、お姉さん』といった感じでしょうか。
　その奥には『理解者』という共通したものがあります。理解者は『信頼』によって繋ぎとめられています。
　結論的な言葉として『信じあう』になります。
　このつながりは家族間で最も強いものであると思います。それが理想でしょう。
　私は徹底して子どもたちの味方になります。それには条件があります。『精一杯』であることです。
　結果ではなく、その場その場の表情に精一杯が感じられれば、しっかりと褒めてあげる。これを徹底して言い続けています。
　テストなし、競争なし、くらべっこなし。それぞれが今の自分の目の前のことに精一杯・・・それが本当の本物の１００点。やがて子どもたちはわからないところは「わかりません」と言って質問に来るようになります。自分の世界を楽しむようになります。１００％そうなっていないのが歯がゆいのですが、ここは腹八分目、無理はしません。努力はします。
　さて、そんな栗田の腹の中を理解しはじめた子たちは『信頼』を感じ始めます。長く通う子たちは、もうわかりきっていることなので、ここが第２の我が家と化します。中学生くらいになると「ただいまー」といって入ってきたり・・・。これには感動です。その終着点的な発言が「泊まってくー」です。いまだ泊めたことなどありません。当たり前なことなのですが、本当に嬉しいです。
　ある日、見学の方がみえました。そのときふっと、ある質問を子どもたちにしました。「学校の勉強、大好きな人？」
「・・・・・。」「じゃー、勉強は好きではないけど、栗田が教えるんだったらやってもいいよって思う人？」
　全員が「ハーイ。」・・・・・正直嬉しかったです。毎日この子たちと勉強がしたいな、毎日この子たちといろんな実験やら、観察やら、思ったこと感じたことを思う存分言いあってみたいな。
　様々な学年がごちゃごちゃに混ざりあって、まるで過疎地の分校みたいな小さな教室で、いじめの『い』の字など全くない、助け合って笑いあって過ごせる場所・・・・・ここにあり。
　朝からここへ来て勉強がしたいって言ってくれる子が結構います。
　現状の学校が１クラス２０人を限度とし、テストによる評価をやめ、１本線に引いた教科書主義を廃し、子どもたちとの心の通い合いに重点を置いた授業を展開されるよう切に願ってやみません。

それにしても皆さんよ、ありがとな。